

実施過程	実施内容・要点	時間 60分	プレ ゼン	進行者の主な指示例・発問例	*留意点 【 】内は使用する資料名
はじめに	<p>◎本校内研修の概略説明 ○ウォーミングアップ</p> <p>1 ねらいの確認 (1) 児童生徒を発達課題という視点から理解することの意義とそれに伴う校種間連携の大切さを理解する。 (2) 演習を通して、児童生徒の発達をつなぐ視点から、児童生徒理解や校種間連携の在り方を考える。</p>	5	1	<p>〔説明〕今日は「児童生徒の発達をつなぐー発達課題、校種間連携の理解を通してー」について研修します。研修の前にウォーミングアップをします。「学校版 ○○といええば」です。これから私が、○○といええばと質問しますので、そこから連想する言葉をイメージして下さい。例えば、4月といええば・・・入学式といった感じです。1つ目です。夏の行事といええば。(10秒程度待つ)隣の人とペアになって、イメージしたものを伝え合ってください。○○先生はどのようなものをイメージしましたか？(異なる校種の研修者数名に答えてもらう)2つ目です。冬の行事といええば。(10秒程度待つ)隣の人とペアになって、イメージしたものを伝え合ってください。○○先生はどのようなものをイメージしましたか？(異なる校種の研修者数名に答えてもらう)3つ目です。子どもが好きな行事といええば。(10秒程度待つ)隣の人とペアになってください。○○先生はどのようなものをイメージしましたか？(異なる校種の研修者数名に答えてもらう)同じ質問でも、校種によってイメージする行事が似ていたり異なったりしていましたね。行事一つとっても、それぞれの校種で子どもの発達段階に合わせて実践しているのが分かりましたね。</p> <p>2 〔説明〕それでは研修に入ります。今日のねらいを確認します。今回の研修のねらいは「児童生徒を発達課題という視点から理解することの意義とそれに伴う校種間連携の大切さを理解する」「演習を通して、児童生徒の発達をつなぐ視点から、児童生徒理解や校種間連携の在り方を考える」の2つです。</p>	<p>*席は自由 *ミニエクササイズを通して、和やかな雰囲気をつくる。 *異なる校種の行事を取り上げ、発達段階に合わせた実践の様子を確認する。</p> <p>【テキスト資料】</p>
I 説明	<p>2 生徒指導のねらい ・児童生徒の人格の発達の形成⇒児童生徒理解 〔個別理解・・・一人一人の違いを理解する〕 〔一般的な理解・・・発達課題などの視点から理解する〕</p> <p>3 発達段階と発達課題 (1) 発達段階 ・連続的、継続的に進行していく人の発達の中で、他の年齢時期とは異なる特徴のまとまりをもっている特定の年齢時期 (2) 発達課題 ・各発達段階で達成しておかなければならない課題</p> <p>4 乳児期～青年期における心理・社会的な発達課題 ・乳児期「信頼 対 不信」 ・幼児前期「自律性 対 恥・疑惑」 ・幼児後期「主導性 対 罪悪感」</p> <p>・児童期「勤勉性 対 劣等感」 ・青年期「自我同一性 対 同一性拡散」</p> <p>・発達をつなぐ必要性</p>	3	3	<p>3 〔説明〕生徒指導の最終的なねらいは、児童生徒の人格の発達の形成です。児童生徒の人格の発達の形成をうながすための指導の土台となるのが児童生徒理解です。指導する教員が児童生徒を正しく理解することが教育活動においてはとても重要であり、教員には次の2つの視点から理解することが求められます。1つは、一人一人の児童生徒の違いを理解する個別理解です。もう1つは、同じ年代の子どもや発達障がいがある子どもに見られる心理的・行動的な特徴や、不登校・いじめ等の問題の構造を把握するといった一般的な理解です。今日の研修では、一般的な理解の一つの視点である、発達課題について学んでいきたいと思います。</p> <p>4 〔説明〕発達段階と発達課題について確認します。発達段階とは、人の発達の中で、他の年齢時期とは異なる特徴のまとまりを基準にしていくつかの時期に分類したものです。発達段階にもいろいろな分け方がありますが、ここでは、1歳までの乳児期、3歳までの幼児前期、6歳までの幼児後期、12歳までの児童期、20代半ばまでの青年期、30代半ばまでの初期成人期、65歳までの成人期、それ以降の老年期という分け方を紹介します。</p> <p>5 〔説明〕発達課題について説明します。発達課題とは、各発達段階で達成しておかなければならない課題のことです。発達課題は発達上の各時期に達成することが必要であり、うまく達成できると次の発達課題への移行や適応がうまくいきます。しかし、発達課題が未達成だと次の発達課題への移行や適応が困難になります。</p> <p>6 〔説明〕児童生徒の人格の発達の形成に関わる、乳児期～青年期における心理・社会的な発達課題について簡単に説明します。乳児期には授乳やおむつ替えなどを通して、空腹・満腹や快・不快という感覚を養育者との関係で得ていきます。満たされた感覚をもつことで、周りの人は自分を見捨てない、自分は愛されるだけの価値のある人間であるという「信頼」という感覚を獲得できます。泣いても不快のままの状態が続くと、周りの人は信頼できない、自分は愛されるだけの価値はないという「不信」の感覚が育ちます。幼児前期にはおむつをはずす過程で排泄をコントロールすることができるようになります。便意をコントロールできるようになると、自分の行動や欲求を我慢するという「自律性」という感覚が獲得できます。未達成だと、失敗することを恥ずかしがる「恥」という感覚と失敗から自己を信じられなくなる「疑惑」という感覚が育ちます。幼児後期には遊びの中で、自分たちで遊びを考えたり、ルールを考えたり、遊びの計画を立てたりしながら、自分で積極的に行動するという「主導性」という感覚を獲得できます。主導性を発揮しすぎると友達や親などと衝突し、トラブルを生むことで、自分はよくないことをしていると感じ、消極的になる「罪悪感」という感覚が育ちます。</p> <p>7 〔説明〕児童期には、忍耐強く勉強や活動に取り組み、それを着実に完成させたり、その取り組みに喜びを感じたりすることで、やればできるという体験を通して努力することを覚える「勤勉性」という感覚が獲得できます。反対に勉強や活動がうまくいかないことで、何事に対しても自信がもてず、自分が役に立たないと感じる「劣等感」という感覚も育ちます。青年期に発達課題が達成できると、自分はどのような性格なのか、将来どのような生き方をしたいかを模索しながら「自我同一性」が確立できます。未達成だと、自分の将来についての道に進むかも決定しておらず、関心もない「同一性拡散」の状態に陥ります。ここで、「自我同一性」について詳しく説明していきます。</p> <p>8 〔説明〕自我同一性とは、自信、自尊心、責任感、使命感、生きがい感の総称のことをいいます。自分自身が時間的に連続しているという自覚、自分が他の誰かではない自分自身であるという自覚、他者からもそのようなものと見なされているという感覚を得たときに、自我同一性が確立されます。つまり、簡単にいうと、「私は私」という感覚に近いものです。</p> <p>9 〔説明〕青年期は、将来の自分の人生を選ぶこと、「～になることに決めた」「～のために勉強を始めよう」などと、将来のためにスタートラインに立つ覚悟を決めることが大きな課題となります。だからこそ、この時期の自我同一性の確立が人格の形成に大きく関与するのです。</p> <p>10 〔説明〕したがって、青年期までのそれぞれの発達課題の達成が、自我同一性を確立するための土台となります。また、自我同一性の確立が、青年期の初期成人期や成人期、老年期の発達にも大きく関与していきます。</p> <p>11 〔説明〕だからこそ、それぞれの発達段階に大きく関わる保育所・幼稚園、小学校、中学校、高等学校では子どもの発達をつなぐという視点をもち、児童生徒の人格の発達の形成に携わっていく必要性があります。</p>	<p>【テキスト資料】</p> <p>*例えば、乳児期の不信の感覚を得ることで、自分が人の迷惑になっているのではないかという遠慮という気持ちも育つ。一方、信頼だけで不信をもたない人は、自分は他者にいつでも受け入れられると行動し、凶々しい人になる。発達上、未達成の部分を完全に排除するのではなく多少は必要であるが、次の発達段階の発達課題への移行や適応がうまくいくようにするためには、それぞれの発達段階で未達成よりも達成の部分が占めるようになることが重要である。</p> <p>【参考資料】 *児童生徒だけでなく、研修者自身の発達についても理解が深まるよう、説明や演習、研修後に参考にしよう。</p>
II 演習	<p>5 演習1 「発達課題から対応策を考えよう」</p>	18	12	<p>〈指示〉これから、演習をします。演習資料「発達課題から対応策を考えよう」を用意してください。(演習進行案を参照) 〈指示〉(演習1終了後に)テキストの説明に戻ります。準備をお願いします。</p>	【演習進行案・演習資料】
III 説明	<p>6 子どもの発達をつなぐ際、校種間に起きている問題 ・小1プロブレム ・中心だった幼稚園・保育所から学習が中心の小学校への大きな環境の変化が原因の一つとして考えられています。次に、小学校と中学校の間には、中1ギャップという問題があります。いじめや不登校などの問題行動が中学1年生になると増加するという問題です。学級担任制から教科担任制への移行や校則厳格化への不適応、友人や部活動での先輩・後輩関係などの人間関係の不適応が原因としてあげられています。また、中学校と高等学校の間には、高1クライシスという問題があります。入学後に不登校や中途退学などに陥りやすい問題です。中学校と高等学校の学校の特色の違いや教員・友人などの人間関係の変化に適応できないことなどが原因として考えられています。これらの問題を解決するためには、幼稚園・保育所、小学校、中学校、高等学校のそれぞれが単独で解決を図ろうとしても不十分ですので、各校種で連携する必要があります。</p> <p>・発達をつなぐという視点に立った校種間の連携が必要</p>	3	13	<p>13 〔説明〕子どもの発達をつなぐ際、校種間にどんな問題が起きているのでしょうか。まず、幼稚園・保育所と小学校の間には、小1プロブレムという問題があります。小学校入学後、落ち着いて教員の話を開けなかつたり、教室を歩き回ったりして授業が成立しないという問題です。遊びの間中心だった幼稚園・保育所から学習が中心の小学校への大きな環境の変化が原因の一つとして考えられています。次に、小学校と中学校の間には、中1ギャップという問題があります。いじめや不登校などの問題行動が中学1年生になると増加するという問題です。学級担任制から教科担任制への移行や校則厳格化への不適応、友人や部活動での先輩・後輩関係などの人間関係の不適応が原因としてあげられています。また、中学校と高等学校の間には、高1クライシスという問題があります。入学後に不登校や中途退学などに陥りやすい問題です。中学校と高等学校の学校の特色の違いや教員・友人などの人間関係の変化に適応できないことなどが原因として考えられています。これらの問題を解決するためには、幼稚園・保育所、小学校、中学校、高等学校のそれぞれが単独で解決を図ろうとしても不十分ですので、各校種で連携する必要があります。</p> <p>14 〔説明〕子どもは、校種に合わせて断続的に発達するのではなく、連続的に発達していきます。ですから、各校種でその時期に達成すべき課題を把握して支援していくことが大切です。さらに、子ども一人一人の発達は異なりますので、発達の遅い子には先ほどの演習のように、前の発達段階に戻って適切な支援をするなど、一人一人の発達に応じて支援していく必要があります。だからこそ、それぞれの校種で子どもの発達をつなぐという視点に立った連携が必要になってくるのです。</p>	【テキスト資料】
IV 演習	<p>7 演習2 「校種間で子どもの発達をつなぐためには？」</p>	18	15	<p>〈指示〉これから、演習をします。(演習進行案を参照) 〈指示〉(演習2終了後に)研修のまとめをするので、テキストを準備してください。</p>	【演習進行案】
V まとめ	<p>◎活動の振り返り</p> <p>◎進行者のまとめ ・児童生徒を正しく理解すること 〔個別理解・・・一人一人の違いを理解する〕 〔一般的な理解・・・(発達課題)などの視点から理解する〕 ・児童生徒の発達をつなぐ視点をもつこと 幼稚園・保育所、小学校、中学校、高等学校の(連携)が大切</p>	3	16	<p>《発問》今日の研修はいかがだったでしょうか。研修全体を通しての感想を発表してください。ここで様々な校種の先生方が一堂に会して一緒に研修をしたように、それぞれの校種の先生方が連携して、児童生徒一人一人の発達をつないでいけるようにしたいですね。</p> <p>16 〔指示〕研修のまとめをします。テキストのまとめの()に今日のキーワードを入れて確認してください。(1分程度時間を取る)</p> <p>17 〔説明〕まとめを読み上げていきます。生徒指導の最終的なねらいは、児童生徒の人格の発達の形成です。そのために、次の2点が大切になります。1つ目は、児童生徒を正しく理解することです。一人一人の違いを理解する個別理解と発達課題などの視点から理解する一般的な理解により児童生徒への理解が深まります。2つ目は、児童生徒の発達をつなぐ視点をもつことです。そのためにも、幼稚園・保育所、小学校、中学校、高等学校の連携が大切です。(称賛)今日は、先生方の熱心な取り組みがたいへん印象に残りました。ありがとうございました。</p>	<p>*研修の感想を生かしながら、発達課題の視点から児童生徒を理解すること、児童生徒の発達をつなぐ視点に立った校種間の連携が大切であることを強調する。 【テキスト資料】 *テキストを基にまとめを丁寧にやっていく。</p>

「児童生徒の発達をつなぐ」 －発達課題、校種間連携の理解を通して－

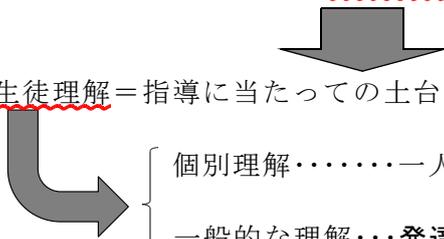
1 研修のねらい

- (1) 児童生徒を発達課題という視点から理解することの意義とそれに伴う校種間連携の大切さを理解する。
- (2) 演習を通して、児童生徒の発達をつなぐ視点から、児童生徒理解や校種間連携の在り方を考える。

2 生徒指導のねらい

最終的なねらいは児童生徒の人格の発達の形成

児童生徒理解＝指導に当たっての土台

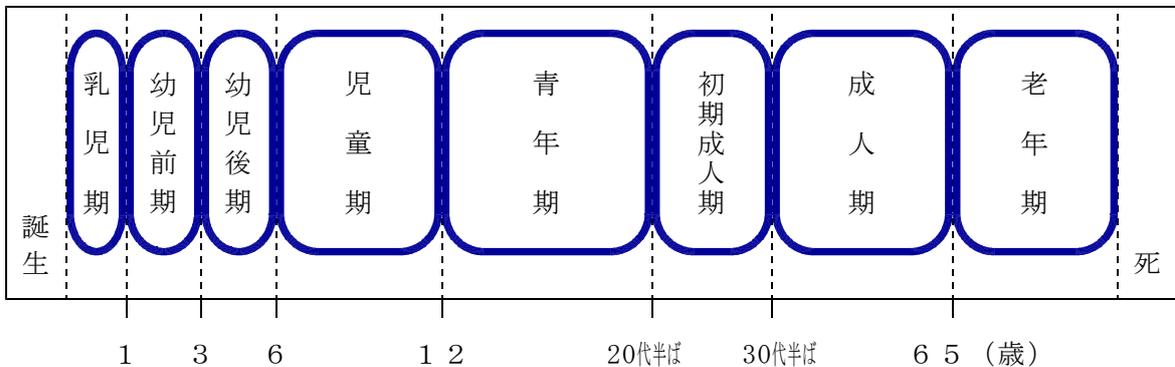


- 個別理解……一人一人の違いを理解する
- 一般的な理解……発達課題、発達障がい、不登校・いじめの構造等の視点から理解する

3 発達段階と発達課題

(1) 発達段階

連続的・継続的に進行していく人の発達の中で、他の年齢時期とは異なる特徴のまとまりをもっている特定の年齢時期のこと。



【エリクソン：漸成的発達理論より】

(2) 発達課題

各発達段階で達成しておかなければならない課題のこと。

- ・ 発達課題を達成 ⇒ 次の発達課題への移行や適応がうまくいく。
- ・ 発達課題が未達成 ⇒ 次の発達課題への移行や適応が困難になる。
(達成できないことによる発達の偏りや未熟さが、様々な不適応行動の要因になることが多い。)

4 乳児期～青年期における心理・社会的な発達課題

発達段階	主な関係性	発達課題	
		達成	未達成
乳児期 0～1歳	母親	信頼 ----- 誰か（親）を心から信頼できるという気持ちをもてるようになる状態	不信 ----- 周りの人は信頼できない、自分も愛されるだけの価値はないという状態
幼児前期 1～3歳	両親	自律性 ----- 自分の意思で排泄や生活をコントロールしながら我慢することを学んでいる状態	恥・疑惑 ----- 自分が課題を解決するという自信をなくし、失敗することを恥ずかしがったり、自己を信じられなかったりする状態
幼児後期 3～6歳	家族	主導性 ----- 遊びを通して自分で考えて自分で行動する積極性を得ていく状態	罪悪感 ----- 同じような他者の動きと衝突したり、競争したりする中で、過度に衝突し、自分はよくないことをしていると感じる状態
児童期 6～12歳	地域・学校	勤勉性 ----- やればできるという体験をして、勤勉に努力することを覚える状態	劣等感 ----- 何事に関しても自信がもてず、「自分が役に立たない」と感じる状態
青年期 12～20代半ば頃	仲間・外集団	自我同一性 ----- 自分はどのような性格なのか、将来どのような生き方をしたいかを模索しながら自我同一性を確立する状態	同一性拡散 ----- 自分の将来についてどの道に進むかも決定しておらず、関心もない状態



※ 自我同一性：自分自身が時間的に連続しているという自覚と、自分が他の誰かではない自分自身であるという自覚とが、他者からもそのようなものと見なされているという感覚を得ること。

☆ 自我同一性は青年期までのそれぞれの発達課題の達成が土台となっている。さらに、自我同一性の達成は、青年期後の初期成人期、成人期、老年期にも大きく関与していく。つまりは、青年期は人格の形成に大きく関与する時期でもある。



それぞれの発達段階に大きく関わる幼稚園・保育所、小学校、中学校、高等学校では、子どもの発達をつなぐ視点をもつ必要がある。

5 演習 1

- 演習資料「発達課題から対応策を考えよう」に取り組んでみましょう。

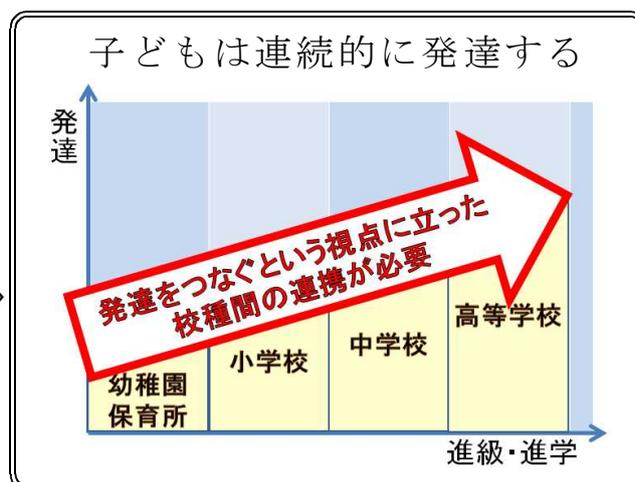
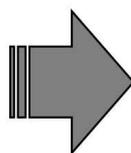
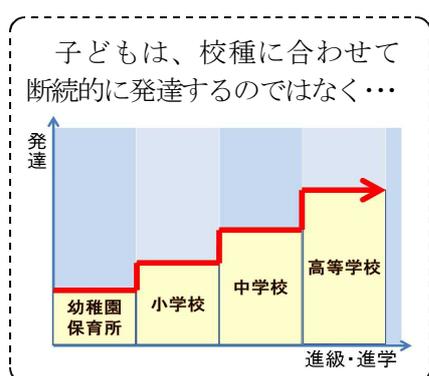
6 子どもの発達をつなぐ際、校種間におきている問題

- 「小1プロブレム」 : 自己中心性が残り、感情的・衝動的な言動が多く、小学校生活にうまく適応できなかったり、授業が成立しにくかったりする問題
- 「中1ギャップ」 : 小学校と中学校の学習や生活の変化になじめず、不登校やいじめなどの問題行動が増加する問題
- 「高1クライシス」 : 入学後に不登校や中途退学などに陥りやすい問題



これらの問題を解決するためには…

幼稚園・保育所、小学校、中学校、高等学校で子どもの発達をつなぐという視点に立った連携が必要



7 演習 2

- 演習「校種間で子どもの発達をつなぐためには？」に取り組んでみましょう。

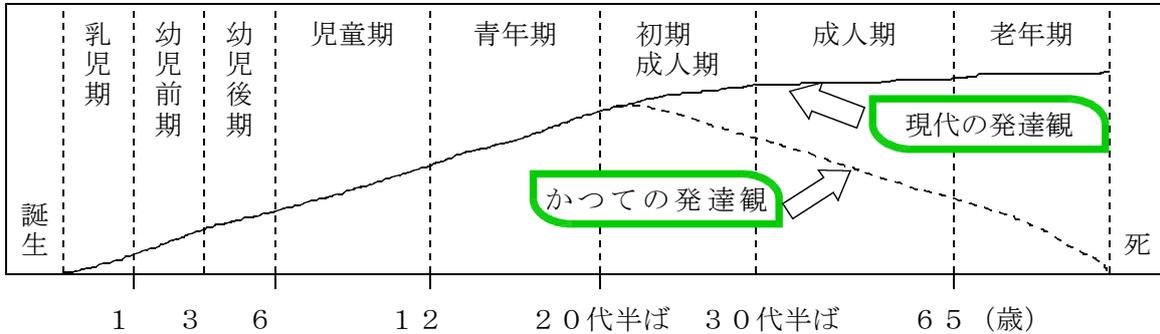
8 まとめ ～（ ）に本日の研修のキーワードを入れてみましょう～

生徒指導の最終的なねらいは、児童生徒の人格の発達の形成

- 児童生徒を正しく理解すること
 - ┌ 個別理解……一人一人の違いを理解する
 - └ 一般的な理解……（ ）、発達障がい、不登校・いじめの構造等の視点から理解する
- 児童生徒の発達を（ ）視点をもつこと
幼稚園・保育所、小学校、中学校、高等学校の（ ）が大切

「児童生徒の発達をつなぐ」 －発達課題、校種連携の理解を通して－

1 生涯発達の考え方



○ 「発達は全生涯を通じて常に獲得（成長）と喪失（衰退）とが結びついて起こる過程である」
【ポール・バルテス】

||

身体的成長や記憶力は20歳頃をピークに緩やかに衰退していく。その一方で、人生を生き抜く知恵や技は磨かれていく。人生のはじめから終わりまで、人間は様々な発達を遂げていく。

2 初期成人期～老年期における心理・社会的な発達課題

発達段階	主な関係性	発達課題	
		達成	未達成
乳児期～青年期の発達課題はテキスト通り			
初期成人期 20代半ば ～30代半ば	友だち ・ パート ナー	親密性 相手の価値観や自分とは異なる部分を認めながら、他者との親密な関係を築くことができる状態	孤立 誰かと親しくなることは自分を失うことだと考え、心理的な柵を作る状態
成人期 30代半ば ～65歳	家族・ 同僚	生殖性 社会の一員として、自分の持っている能力、知識、技術、創造性を自分だけでなく子どもにも、そして社会に対して与える状態	自己吸収 人の世話をすることには興味が向かわず、自分が褒められたい、自分の思い通りにことを進めたいという状態
老年期 65歳以上	人類	統合性 過去から死を含めた将来を自分の人生として受け入れる状態	嫌悪・絶望 人生に後悔し、自分のものとして認めがたい状態

【エリクソン：漸成的発達理論より】

3 反抗期（健康な自我発達の現れ）

	時期	特徴	対応の仕方
第一次反抗期	2, 3歳頃	言い出したら聞かない、何でも相手の言うことに反対する。自我が芽生え、「やりたい気持ち」と「できない現実」の葛藤が生じる。	子どもの主張も十分に聞き、気持ちを理解した上で、生活のルールの必然性を理解させながら教えるようにする。
第二次反抗期	小学校高学年～中学生頃	親や教師など周囲の大人や社会に対して、反発を抱いたり、反抗的な行動が現れる。	自分の意思と他者の意思を調整する能力を身につけさせるようにする。また、自分の主張に責任をもつ態度を育てるようにする。

4 小学生・中学生・高校生の発達上・教育上の課題

- 発達上の課題：人格形成および社会的適応をするうえで、発達の各時期に達成しておかなければならない課題
- 教育上の課題：学校教育の中でその学齢の各時期に達成しておくべき課題

＜児童期（小学生）の発達上の課題と教育上の課題＞

発達上の課題	教育上の課題
① 学習面	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 基本的な読み書き計算ができるようになる。 ・ 日常生活で出会う概念について学ぶ。 ・ 社会の歴史や制度のあり方について学ぶ。 ・ 具体的な材料を対象として、論理的に思考できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 小学校での学習に興味・関心をもつ。 ・ 学校や家庭で学習する習慣を獲得する。 ・ 集団での学習生活に適応する。 ・ 45分、学級担任の教師の指導・援助にしたがって、授業に参加する。 ・ 宿題をきちんと行う。 ・ 授業の内容を理解する。
② 心理・社会面	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 感情を統制し、深め、他者への共感と結びつけられる。 ・ 自己に対しての肯定的で的確な態度を形成する。 ・ 勤勉に学び、生活する態度を身につける。 ・ 道徳の原則を内在化して、自律的に道徳的な判断ができる。 ・ 友だち関係を広げ、同年齢の集団の一員として行動できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 小学生として誇りをもつ。 ・ 親のいない学校で、情緒の安定を維持する。 ・ 友だちをつくり維持する。 ・ 集団の学習や活動に適応する。 ・ 学級担任の教師と適切な人間関係をつくり維持する。 ・ 学級の友だちと適切な人間関係をつくり維持する。
③ 進路面	
<ul style="list-style-type: none"> ・ あこがれる対象をもつ。 ・ あこがれの職業が言える。 ・ 空想でよいから、将来の夢が語れる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習や遊び場面で、自分の行動について選択する。 ・ 自分の得意なものや楽しめるものをみつける。 ・ 学級活動を通して役割をもつ意味を知る。

<青年期（中学生）の発達上の課題と教育上の課題>

発達上の課題	教育上の課題
① 学習面	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 抽象的な思考や科学的論理が実行できる。 ・ 社会の仕組みを理解して、社会の問題点を把握し、批判できる。 ・ 内面の言語化が可能になる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 中学校での学習に興味、関心をもつ。 ・ 学習習慣を維持、強化する。 ・ 各教科の授業に参加し、理解する。 ・ 小学校時代の学習成果を補いながら、生かしながら、新しい教科内容を理解する。 ・ 中学時代の学習生活や学習内容に応じる学習方略を獲得する。 ・ 高校受験の準備の学習を行う。
② 心理・社会面	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 身体的な変化を受け入れ、対処することができる。 ・ 親から情緒的に自立し、自分なりに行動し、判断する。 ・ 親しい友人をつくり、親密かつ率直な話ができる。 ・ 性役割の変化に応じて行動できる。 ・ 異性とのつきあいにあこがれたり始めたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 中学生である自分を受け入れる。 ・ 入学した中学校を受け入れ適応する。 ・ 自分のイライラを受け入れ、対処する。 ・ 学級や部活動で、親しい友人をつくる。 ・ 学級担任の教師や教科の教師と適切な人間関係をつくり維持する。
③ 進路面	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 同輩との関連で、自己の相対的位置づけを知り、自分なりの個性的な価値について自信をもつ。 ・ 社会的な役割を積極的に体験することで、「ありたい自分」について語れる。 ・ 社会の価値を知ったうえで、自分なりの価値や倫理をもち、行動に生かしている。 ・ 進路の選択を考え、方向を見いだす。 ・ 意見・価値観の異なる他者との関係がつけられる。 ・ 葛藤を解決する力を身につける。 ・ 現実と夢のギャップに気づく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習内容と将来を結びつける。 ・ 学級や部活や生徒会活動等で、自分の行動について選択する。 ・ 自分の将来設計をしてみる。 ・ 将来の進路について、複数の可能性を考え情報を収集する。 ・ 具体的な進路について教師・保護者に相談して決定してみる。

<青年期（高校生）の発達上の課題と教育上の課題>

発達上の課題	教育上の課題
① 学習面	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 抽象的な思考や科学的論理が実行できる。 ・ 社会の仕組みを理解して、社会の問題点を把握し、批判できる。 ・ 内面の言語化が可能になる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 高校での学習に興味、関心をもつ。 ・ 学習習慣を維持、強化する。 ・ 小学校・中学校時代の学習成果を補いながら、生かしながら、新しい教科内容を理解する。 ・ 高校時代の学習生活や学習内容に応じる学習方略を獲得する。 ・ 大学受験や就職試験等の準備の学習を行う。

② 心理・社会面	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 身体的な変化を受け入れ、対処することができる。 ・ 親から情緒的に自立し、自分なりに行動し、判断する。 ・ 親しい友人をつくり、親密かつ率直な話ができる。 ・ 性役割の変化に応じて行動できる。 ・ 異性とのつきあいにあこがれたり始めたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 高校生である自分を受け入れる。 ・ 入学した高校を受け入れ適応する。 ・ 学校への不安や不満に対処する。 ・ クラスや部活動や地域で、親しい友人をつくり、議論する。 ・ クラス担任の教師や教科の教師等と適切な人間関係をつくり維持する。
③ 進路面	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 同輩との関連で、自己の相対的位置づけを知り、自分なりの個性的な価値について自信をもつ。 ・ 社会的役割を積極的に体験することで、「ありたい自分」について語れる。 ・ 社会の価値を知ったうえで、自分なりの価値や倫理をもち、行動に生かしている。 ・ 進路の選択を考え、方向を見いだす。 ・ 意見・価値観の異なる他者との関係がわかる。 ・ 葛藤を解決する力を身につける。 ・ 現実と夢のギャップに気づく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ クラスや部活や生徒会活動等で、自分の行動について選択する。 ・ 学校生活を通して、自分の適性を吟味し、将来設計をしない。 ・ 職業について理解する。 ・ 進路について、多様な情報を収集し、具体的な進路を選択する。

【石隈利紀：学校心理学より】

発達課題から対応策を考えよう

【事例】

○ A男（小学1年生）の様子

- ・ 授業中は、集中して学習することができずに、床に寝そべったり、何も言わずにトイレに行ったりしている。
- ・ 教員が話している途中に、友達にちょっかいを出していることが多い。
- ・ 宿題は、毎日行っているが、提出することを忘れていることが多い。
- ・ 身の回りの整理整頓や授業前の準備などは、自分一人ではなかなかできない。
- ・ 休み時間は、校庭で友達と鬼ごっこなどをして遊んでいるが、自分勝手な行動から友達をたたいたり、よくない言葉を発したりして、けんかのきっかけをつくることが多い。

○ A男自身とA男の周りの様子

- ・ A男に発達障がいはない。
- ・ A男に対するいじめはなく、A男が困っていると優しく教える姿が見られる。

発達課題の視点

（記入例）乳児期の「信頼」が未達成

対応策

「発達課題から対応策を考えよう」

〈準備物〉

- ・演習資料（発達課題から対応策を考えよう）
- ・筆記用具
- ・ストップウォッチ

演習のねらいの説明

- ・「これまでの発達課題についての説明をもとにして、演習をしていきます。演習資料『発達課題から対応策を考えよう』をご覧ください」
- ・「この演習のねらいですが、児童生徒を理解するために、発達課題から問題をとらえ、対応策を考えていけるようにします」
- ・「この事例では、いじめや発達障がいはないという視点で、演習に取り組んでください」



個人で記入する（5分）

- ・「事例を読み、『発達課題の視点』と『対応策』を個人で考え、それぞれの枠の中に自分の考えを記入してください。時間は5分間です」



ペアで話し合う（3分）

- ・「隣の席の方とペアになってください。記入した内容について、お互いに伝え合い、相手はどのような視点や対応策をもっているのか確認してください。さらに、気づいたことや考えたことを話し合ってください。時間は3分間です」

（進行者は話し合いの内容を聞きながら、次の活動の発表者を選んでおくとよい。発達課題の視点が異なるペアを選ぶことで、とらえ方に差異があることを全体で共有するのもよい）



全体で共有する（10分）

- ・（意図的に研修者を指名する）「先生はどのような発達課題の視点を持ちましたか。その理由も合わせてお答えください」（研修者に答えてもらう）
- ・「それに対して、どのような対応策を講じようと思われましたか」（研修者に答えてもらう）
- ・「ありがとうございました。（発表者とペアになった先生に答えてもらう）ペアになった先生は、どのような発達課題の視点を持ちましたか。その理由も合わせてお答えください」
- ・「それに対して、どのような対応策を講じようと思われましたか」（研修者に答えてもらう）
- ↓
- ・（時間があれば、別なペアを指名して同じ要領で答えてもらう）
- ↓
- ・「ありがとうございました。今、先生方に発表してもらったことを振り返ります」（発表の中にあつた、発達課題の視点と対応策を取り上げ、全体で確認していく）

<振り返りの視点>

- ・乳幼児期の信頼が未発達であるにとらえて、A男がみんなのためにしてくれたことに対して「ありがとう。助かるわ。」などと声をかけたり、本人が嫌がらなければ握手やハイタッチなどをして、スキンシップを図ったりして、安心感を持たせるような支援をする。また、本人が失敗してしまったときには、失敗を責めるのではなく、本人の思いを受け止めたり、本人の考えを引き出したりしながら、よい行いについて話し合うようにする。
- ・幼児前期の自律性が未発達であるにとらえて、小さなことでもよいので本人が課題を解決できたときに認めて、少しずつ自信がもてるように支援していく。
- ・幼児後期の主導性が未達成であるにとらえて、本人の目標や課題を一緒に考え、達成できるように応援する。成功体験を積み重ねるようにしていき、自発的な行動が増えるように支援していく。

- ・「発表された先生方とは異なる発達課題の視点や対応策を考えた先生方もいらっしゃると思います。発達は連続していますので、未発達の部分を特定するのは難しいですし、対応策も多様ですので、明確な答えはないとお考えください。しかし、児童生徒に問題を感じたとき、発達の過程につまずきがなかったかという発達課題の視点からも考えていただきたいと思います。そこから、児童生徒本人や家庭から情報を得たり、児童生徒の言動を注意してみたりすることで、より正確な児童生徒理解につながり、適切な支援につなげることができます」

「校種間で子どもの発達をつなぐためには？」

〈準備物〉

- 全員に
 - ・記入用の用紙（研修者の校種ごとに色を変える。大きさは、ホワイトボードに貼って文字が見える程度のものがよい）
 - ・マーカー
- 会場に
 - ・ホワイトボード（イメージ図のように、連携のキーワードを事前に記入し、裏返しておく。分類・説明する時にキーワードが見えるようにするとよい）
 - ・ホワイトボード用マーカー
 - ・ストップウォッチ
 - ・磁石

演習のねらいの説明

- ・「では、校種間で子どもの発達をつないでいくためにはどのようなことをしていけばよいのでしょうか」
- ・「この演習では、校種間の連携でできそうなことを、具体的に考えていきましょう」



個人で取り組む（2分）

- ・「子どもの発達を校種間でつないでいくためにできそうなことを一人1つずつ考えて、お配りした用紙にマーカーで大きく記入してください。記入例ですが、私は小学校教員ですので中学校との引き継ぎの際に、要録だけでなく、中学校生活で心配が予想される子どもの情報を、できればですが文書で引き継ぎたいと考えました。このように、今できていることでもよいですし、できそうなことを考えていただいてもよいので、具体的に記入してください。また、用紙に先生方のお名前も記入してください。時間は、2分間です」

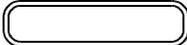


分類・説明する（10分）

- （ホワイトボードにキーワードを記入しておく）
- ・「次に、こちらのホワイトボードに用紙を貼っていただきます。その際、ホワイトボードに連携のキーワードを書きましたので、ご自分が書いた内容と合うキーワードの下に用紙を貼ってください。例えば、私が先ほど発表した内容は、『情報』に属しますので、その下に貼ります。では、用紙への記入が終わった先生は貼ってください」

授業	体験	情報	その他
小・中教員の相互乗り入れ授業	小学生が中学校の文化祭に参加	中学生の映像による中学校生活の紹介	中学生が小学校に「卒業生訪問」をして後輩に中学校の様子を知らせる
小学校の高学年から教科担任制を採用	中学校教員が小学校で給食を一緒に食べながら6年生の生活の様子を観察	小・中教員がゴールデンウィーク後に生徒の情報交換	入進学前の児童生徒を対象とした実態把握用アンケートの実施

<ホワイトボードのイメージ図>

※ 内のキーワードのみをホワイトボードに記入する。

※ 内は予想される研修者の意見例。

- ・「次に、どのような理由で先生方が記入なさったのかお聞きしていきたいと思います。では、キーワードの『授業』に貼った〇〇先生、どのような意図でお書きになったか教えてください」
- ・「ありがとうございました」
- ↓
- ・（同様にして分類ごとに記入した研修者に発表してもらおう。その際、同じ分類でも異なる校種の先生に話していただくと、それぞれの校種の意図が把握できてよい）



全体で共有する（5分）

- ・「このホワイトボードを見て、気づいたことや感想がありましたら、発表してください」（複数名の研修者に発表してもらおう）
- （進行者が適宜、以下のような視点で研修者の意見を取り上げていくことで、校種間連携の重要性を全体で共有するようにする）

◇地域で現在取り組んでいること
 ◇取り組んでいないが発達をつなぐためにできそうなこと
 ◇用紙の色を見て別な校種でも同じような取り組みをしていること
 以上のような視点で、進行者が地域の実態や研修者の意見の傾向等を考慮してコメントを加えていくとよい

- ・「先生方、いろいろな意見を出していただきまして、ありがとうございました。今出していたいただいたことを、お互いの校種で参考にしていきながら、各校種で力を合わせて子どもの発達をつないでいきましょう」

〈参考文献一覧〉

- ◇ 生徒指導提要
文部科学省
(2010年)
- ◇ 生涯発達心理学
岡本祐子・深瀬裕子編著
(2013年 ミネルヴァ書房)
- ◇ 青年心理学
大野久編著
(2010年 ミネルヴァ書房)
- ◇ 手にとるように発達心理学がわかる本
小野寺敦子著
(2009年 かんき出版)
- ◇ カウンセリングの進め方
武田健著
(1992年 誠信書房)
- ◇ 発達と教育の心理学
藤田主一・齋藤雅英・宇部弘子編著
(2013年 福村出版)
- ◇ 生徒指導・進路指導の理論と実際
河村茂雄編著
(2011年 図書文化)
- ◇ 学校心理学
石隈利紀著
(1999年 誠信書房)
- ◇ 学びと発達の連続性
全国幼児教育研究協会編著
(2006年 チャイルド本社)
- ◇ 中1ギャップ
石川晋・石川拓・高橋正一共著
(2009年 学事出版)
- ◇ L a d d e r
(中1ギャップ・高1クライシスを解消するために)
北海道教育庁学校教育局
(2010年)